



校長室の窓から

感動は、努力のたまもの！

ワールドカップサッカー・カタール大会での日本の闘いが終わりました。ベスト8を目標に掲げて試合に臨んだ日本チームでしたが、惜しくもベスト16で姿を消すこととなりました。目標には達しなかったものの、クロアチアに敗れた後のサポーターの声はどうだったでしょう。ほとんどの人が、「選手はよく闘った！」「感動をありがとう！」「次回のベスト8への目標が近づいた！」など、概ね満足し、感動したことがうかがわれました。

神石小学校の児童も、この1か月の間に、たくさんの感動を私たちに与えてくれました。マラソン大会での、一生懸命に最後まであきらめずに走り続ける姿。学習発表会での、大きな声で・大きな動作で友達と協力して表現する姿。全校ミニコンサートでの、まわりの音を聴きながらリズムに合わせて強弱もつけながら演奏する姿。どれも、一人一人の子ども達を見ていると、胸が熱くなり自然に涙があふれ出てくるものでした。

この感動は、それまでの過程である「練習してきた姿」が思い出されるからこそ、こみ上げてくるものだと思います。「今年は(自分にとっての)新記録を出したい・・・」と言って、マラソンタイムだけでなく、休憩時間にも友達とグラウンドを走ったり、コース練習で真剣な目つきをして走ったりする姿を見てきました。発表会練習をし始めたときには、自信がないように目線が下がったり、声のトーンが低かったりした子ども達でしたが、練習が進むにつれて、「友達ががんばっているから自分ももっとがんばりたいんだ。」「お家の人に、堂々としたところを見てほしいんだ。」と言って、声に・動作にと工夫してきて、だんだんと自信があふれるようになってきた姿も見てきました。新しい楽器、新しい曲になって、はじめは「やる気満々」だったのに、練習が進むと、うまく周りの人のリズムとそろえることができなくて、自信がなくなり、やる気もなくなり練習をあまりしなくなった子どももいました。そんな子も、改めて練習時間をつくると、一つずつできるフレーズが多くなり、また手や指を軽やかに動かせるようになってきた姿を見てきました。

子ども達は、多くの感動を私たちに与えてくれました。しかし、その裏で子ども達は、多くの努力をしていたのです。

ワールドカップで活躍した日本の選手、神石小学校の子ども達。どちらも、目標に向かって努力し続けたからこそ、そして多くの仲間とともに目標に向かっていったからこそ、私たちに感動を与えたのでしょう。きっと、子ども達も、保護者の皆様をはじめ、多くの人からのお褒めの言葉をもらい、感動したことでしょう。そして、その感動とともに得た自信は、次への行動となって表れるものと思います。

神石小学校の子ども達よ。本当に感動をありがとう!!

校長 田丸 栄